

2209gorilla

2022.9 ブログ：『ゴリラから見た人間の非常識』を読んで、の詳細
(→ <http://www.1968start.com/M/blog/index2.html#2209>)

『ゴリラから見た人間の非常識』を読んで

中所武司

■この本の読書のきっかけ

日立返仁会の会報（返仁、No. 131、2022. 5. 31）（注：実際の配送は7月末）に
下記の講演内容（pp. 93-97）が掲載されていた。

その小見出しの「言語の目的」に興味を持った。

- ・日立返仁会フォーラム：京大変人講座 第3回 2022. 2. 16 開催
「ゴリラから見た人間の非常識」～ゴリラは俺の先生だ～
講師：山際壽一（総合地球環境学研究所所長）

■記事内容の要約とコメント（→★）

【講演内容要約から抜粋】

<目次>

1. なぜ対面するのか？
2. なぜ食事を囲んで楽しく食べるのか？
3. なぜ言葉を話し始めたのか？
4. 言語の目的とは何か？
5. 社交とは？

1. なぜ対面するのか？

- ・サル、ゴリラ、人間のコミュニケーションの取り方：
 - *サルは、相手を見つめると威嚇行為となり、優劣関係を示すことになるので、対面することはできない。
 - *ゴリラは、対面は挨拶や仲直りを意味し、顔と顔を付けるほど近づける。
 - *人間は、相手の顔を見て話す、お互いにはパーソナルスペースが存在する。
 - *人間は言葉でコミュニケーションを取れるが、目の表情から気持ちを読むために対面する。
人間の目には白目と黒目があり、黒目が動くことで、相手の気持ちを読むことができる。
この能力は生まれながらに有する進化上の特徴である。

→★乳幼児と母親のアイコンタクトは、その証となるかな。

言葉を話すようになって、2歳児が時々母親の目を見つめる行為を見かける。

- *相手から離れて見ると、言葉以外に、表情や態度で意思を表現していることがわかる。
「目の表情」と言われるように、目を見れば気持ちを判断できる。これが共感力だ。

→★2018.10のエッセイ（<http://www.1968start.com/M/blog/1810BookKodoku.pdf>）

「孤独の発明 または言語の政治学」を読んで、の中の次の引用（p.6）と同じことかな。

『見るという行為の次に、見つめるという行為、すなわち凝視が続くことから、眼が精神の起源であることが納得される。見るから見つめるへの移行は、見るべき対象が、見えるものから見えないものへと移行したことを示す。見えないものとは、とりあえず、見られているその対象が何を考えているかの、その眼には見えない考えのことであるといっている。それを意図といっても、意志といってもいい』

*言葉が発現したのは約7万年前と言われているが、白目／黒目はもっと前に発現していた。共感能力は人間社会で一番大切であり、言葉はそれを高めるために出現した。

言葉は、気持ちを伝えることには役に立っていない。目やジェスチャーで気持ちは伝わる。メールのような言葉だけのやり取りでは、誤解されることがある。

2. なぜ食事を囲んで楽しく食べるのか？

・どこで何を誰とどうやって食べるかは、霊長類の一日の課題である。

*サルにとっては、食事は独占するもので、分配することはない。

*人間は、食卓で取引を行い、奪い合いはしない。

*ゴリラも、食物分配を行い、食物を触媒とした取引が行われる。

・霊長類が群れを作って暮らすのは、暮らしの負担を減らすため。

・霊長類の系統図において：

大人同士の食物分配は、大人から子供へ食物分配する種のみで見られる。

育児期間が長い類人猿や、双子や三つ子を産むマーモセット科は、雌の負担が大きいですが、オスとメスの群居によって、メスにとって、食物を効率よく安全に確保できる。

一方で、群れにオスが加わることで、社会関係が複雑になる側面もある。

・人間は、熱帯雨林から草原へ、そして大陸へと行動範囲を広げるために、

食物を必要以上に集め、仲間と分配し、一緒に食べるようになった。

食物が人間関係を左右する大切な道具となり、このときに言葉はいらない。

食物は、人間関係を構築する貴重な触媒である。

→★人間が食物を仲間と一緒に食べる話から、大学一年で受講した倫理学を思いだした。

倫理とは、同じ釜の飯を食うようなことだ、との話が授業の最初にあった。

〔当時の教科書〕佐藤俊夫：倫理学、東京大学出版会、360円、1960.11.20

第一章の倫理の構造の項（p.11）には、関連する表現がある：

『はやいはなしが、朝おきて三度の食事をとり夜ねる、といった、ほとんど習慣的にくりかえしているわれわれの毎日にしても、じつは社会の習俗とともにそうしていることなのだ。』

この意味からして、習俗はまさしく生活の始点であり、倫理の基底である』

- ・人間が、複雑な社会で食物を自分で生産せずに食べられるのは、流通過程で悪意が生じない、つまり信頼する人間関係が構築されている前提の人間だけに通用する論理である。サルや類人猿は、自分で確かめないと食べられない。

3. なぜ言葉を話し始めたのか？

- ・人間は、700 万年前にチンパンジーと別れ、直立二足歩行を始めた。直立二足歩行は、短距離走では四足歩行よりも速度で劣るものの、長距離歩行が可能となり、器用に手が使えるようになり、食物を運搬できるようになった。また、咽頭が下降し、隙間ができることで、言葉が発せられるようになった。

- ・言葉を話す条件として、歯列がアーチ状になり、犬歯が縮小し、吐息で言葉を発し、認知レベルの向上がある。(チンパンジーは吸息でも発声する)

- ・人間の脳は、40 万年前にはすでに現代人並みの大きさだったが、言葉は発してなかった。

→★手の使用→脳の増大→言語の使用という順だったとのこと。

これで思いだすのは、脳神経外科医のペンフィールドが描いたホムンクルスの図では、大脳皮質の中では、5本的手指と手のひらの制御に占める部位の割合は大きいこと。感覚野では全体の約1/4、運動野は約1/3と言われている。

- ・霊長類の脳化は、社会の規模の増大と正の相関を持ち、仲間の数が増え、社会的複雑さが増したため、脳が大きくなった。
- ・人間は、200 万年前に脳が大きくなる前は、10~20 人の集団だった。現在のゴリラがちょうどこの規模で、共鳴集団と言われ、言葉は不要である。サッカーやラグビーのチームは、この共鳴集団の規模なので、言葉でなく動作で意思が通じあう。
- ・その後、脳容量の増大に応じ、人類が 30~50 人の集団になると、森林からサバンナ、ユーラシア大陸へ行動範囲を拡大した。この集団は、学校のクラスや会社の部課の規模に相当し、構成員の顔と性格を熟知できる。
- ・現代人並みの 100~150 人の集団になると、信頼できる仲間、顔と名前が一致して、身体感覚で共鳴する集団となる。これを社会関係資本と呼ぶ。

→★脳の増大と社会規模の増大に相関があるということは、

脳は、小規模集団で、身振り手振りに使われ、中規模集団で、顔や性格の認識に使われ、大規模集団で、名前（言葉？）による識別に使われたということかな？
とすれば、共鳴集団で言葉は不要でも、名前という言葉は使われ始めていたことになる。

→★幼児の言語機能習得に関しては、最初に物（一般名詞）、次に固有名詞を覚えるので、仲間を識別する名前（固有名詞）の使用前に、モノの名前（一般名詞）が使われていたかも。
(参考書：今井、針生「言葉をおぼえるしくみ」筑摩書房，2014)

- これ以上の規模では、身体感覚以外の手段が必要になり、言葉が生まれたと言われている。
- 言葉が登場するまでの人類の進化に現れた重要な特長として、直立二足歩行、移動距離の増大、捕食者への対処、離合集散性、食物の種類と食べ方の変化、そして、大脳化、があげられる。
- 大脳化が進むことにより、道具制作、生活史の改変、集団規模の増大、集団構成の変化、変化する環境への対応が加速した。
- そして、成長期の改変により、個人志向から集団志向（他人への関心の高まり）へ変化し、コミュニケーションが構造化された。
- 言語ができたから社会が複雑化したのではなく、社会の複雑化により言語ができたのである。

→★ここでは、コミュニケーション言語にのみ言及していて、
私の関心事である思考言語の役割については述べられていない。
(例：自問自答など)

- 実は、言語ができる前は、音楽的コミュニケーションが存在していた。
音楽は翻訳する必要がなく、音やリズムとして仲間に気持ちを伝えることができる。
リズムを重視し、協調、共鳴を要請することで共感能力を高め、集団意識を高められる。
- 類人猿が持っている対面交渉から、人間だけが食事、共同の子育てを行い、共感力が高められて、社会力を強化した集団ができた。
- その後、より大きな集団を維持するため、認知レベルが上がり、階層性のある集団を理解する必要性が出てきたために、言語が創出された。

→★コミュニケーション言語は、必要に応じて発展してきたと思うが、
思考言語の発達過程は不明か？
幼児は、3～6歳ごろに独り言（自己中心言語）を発し、
それが内言（思考言語）になっていくと言われているが・・・

4. 言語の目的とは何か？

- 気持ちを伝えるには音楽の方が優れている。
- 言語は、コミュニケーション効率の向上、つまり、意味の細分化、集団の秩序、集団を越えた社会、世代を超えた文化の継承、学習の効率向上、世界の新しい解釈、創造性のために生まれたと考える。

→★言語の創出とその後の言語の役割拡大（進化）とは分けて考えたほうがよいのでは。

- 一方、言語のもたらした負の側面として、
分類と差別、統合と目的化、アナロジーと抽象化、虚偽と詐欺、善悪や価値の創出、
言葉による暴力があげられる。

→★「善悪や価値の創出」は言語の負の側面？

言語も道具なので、反社会的な利用法もあるのは、包丁などと同じでは。

- 現代は言葉の持つ影響力は増す一方なので、進化のプロセスを順序立てて理解しなければ、
共感によってつくられた社会は壊れてしまう。
- 言葉の持っている真の意味、発現してきたプロセスを理解しながら、
今の科学技術を使って、賢く利用する必要がある。

→★「今の科学技術を使って」とは、メールやSNSのことかな？

5. 社交とは？

- 現代においては、新たな社交を考える必要あり。
社交とは音楽（リズム）であり、行動全体を音楽のように一つの緊張感で貫く。
社交は言葉によって作られるとの考えは間違いで、
ホストが提示する物語を参加者が一緒になって練り上げ、ゴールに達することで成り立つ。
社交は対面しなければ意味がない。

→★対面によるおしゃべりは社交にあらず？

対面しないメールやSNSも社交にあらず？

- 現代の人間は言語におぼれているが、言語が無くても協調していける。
言語は人類が手にした新しい道具であって、まだ安っぽい。
音楽やスポーツなどの共感能力を伝え合うものは、古くから元々身体に埋め込まれている。

→★一見、言語否定に見えるが、共感に関してはということかな。

→★「言語におぼれている」とは、言語にたよりすぎているということか。

小生の学生のころの創作のタイトル「虚言に溺れる」を思い出す。

【質疑応答】

(1) 民族の位置づけは？

(回答) 民族の概念は大きい。死者を辿るのは言葉を使える人間だけ。

コミュニティは今生きている人たちで成立するもので、死者は関係ない。
言葉のなせる業である。

→★推測するに、「コミュニティ」が重要で、「民族」は重要でないということか？
「民族の誇り」とか「偉大な民族」という概念については・・・

(2) 冗談が言いたかったから言葉ができたのでは？

(回答) 間違いではない。日常会話の80%はゴシップやくだらないことだが、
お互いが繋がる。その場にはいない人を介してお互いを繋げられる。

→★リモート勤務の職場で、雑談の重要性が注目されている。

参考：過去ブログ（▼2022.4「リモート職場で、雑談にチャットを利用」）

<http://www.1968start.com/M/blog/index2.html#2204b>

(3) ネアンデルタール人の脳は現代人よりも大きかったのでは？

(回答) ネアンデルタール人には舌骨があったので、言語があったと言われている。
現代人の脳は農耕牧畜のころより縮んでいる。外部記憶媒体の利用で、
脳での記憶が不要となり、さらにA I活用で考える必要もなくなる。
社会が進化すると脳は退化する。

→★ (^_^;;

以上